



市内から出土した弥生土器

### 第9回 掛川考古展

## 弥生時代の掛川

とき 平成25年11月13日㈬～17日㈰ 午前9時～午後5時  
(13日㈬・14日㈭は午後7時まで)

ところ 掛川市立中央図書館 1階生涯学習ホール

掛川市教育委員会

# やよい 弥生時代とは

## 始まり

1万年以上つづいた縄文時代の終わり頃、九州北部に中国大陆から稻作（水稻栽培）がもたらされました。九州北部では、約3,000年前と考えられるこの時をもって弥生時代の始まりとされています。稻作はやがて日本各地に広ります。大陸の進んだ技術や道具によって、それまで利用されていなかった低地を開墾し水田にするなど、積極的に土地の開発が行われていったことが考えられます。そして、人々の生活は、狩猟や採集による生活から農耕による生活に大きく変化していきました。

静岡県では、中期前葉（約2,200年前）から稻作が開始されると考えられています。

時期区分	縄文時代	早期	前期	中期	後期	古墳時代
年代の目安	30000年前	28000年前	22000年前	19000年前	17000年前	

弥生時代の時期区分

## 「弥生」という名称

明治17年（1884）、現在の東京都文京区弥生、東京大学の構内にある貝塚から壺が発見されました。それ以前から知られていた縄文土器とは違う特徴を持った土器であることから、地名をとり弥生式土器と呼ばれ、時代の名称になりました。

## 弥生の集落

### 建物のかたち

住居として使われることが多いのは、地面を掘り下げて壁と床をつくる竪穴住居です。平面形は橢円形か角が丸い長方形のもので、屋根を支える柱は4本です。床の中央付近には煮炊きをする炉がつくられます。また、数は少ないですが、地面をなら



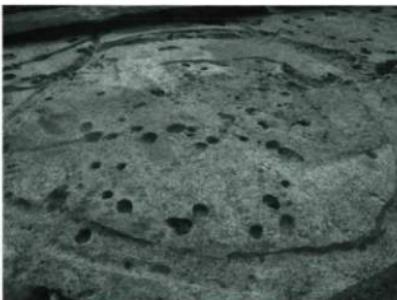
竪穴住居跡（幡ヶ谷山遺跡）

して床として、周囲に円形の溝をめぐらせる平地住居も近年発見されています。

高床の倉庫としてつくられることが多い建物として、掘立柱建物があります。柱は、3本ないし4本ずつ2列にならび、地面に掘った穴に立てられます。

### 集落のようす

掛川市において、稲作が最初に行われた集落は、原野谷川と逆川の合流点に近い低



平地住居跡（幡鎌峯山遺跡）

地に営まれた原川遺跡（原川I）であると考えられています。昭和57年度（1982）から61年度（1986）の発掘調査で、約2,200年前の中期前半の土器棺墓6基と、掘立柱建物跡8棟が発見されています。しかし、水田の跡は調査では見つかっていません。それ以外の中期の集落は、これまでに発掘調査されたことが少なく、実態がはっきりしません。中期に属する墓の跡は、あちらこちらで発見されていることから、人々が生活していたことは間違いないと思われます。

そして、後期の集落は、台地や丘陵地に営まれています。原野谷川によりつくられた高田原や吉岡原と呼ばれる河岸段丘に立地する高田遺跡（高田・吉岡）や女高I遺跡（高田・吉岡）、瀬戸山I遺跡（高田・吉岡）、溝ノ口遺跡（吉岡）などでは、段丘の縁辺や谷に面した場所を中心に建物が集中し、何度も建て替えが行われているところが見られます。この段丘上には、このような集落が点在していることが考えられています。また、小さな集落としては、逆川左岸の丘陵先端近くに立地する東ノ谷遺跡（長谷）があります。住居である竪穴住居跡4軒に対し、倉庫である掘立柱建物跡が1棟という組み合わせにより集落が構成されていたことが考えられています。

市の南部地域では、弥生時代の遺跡分布は少ない状況です。土器が出土している遺跡がいくつかありますが、住居の跡が発見されたことは、これまでにありません。佐束川の流域の低地にある高瀬遺跡（高瀬）、中方北遺跡（小貫）、中方遺跡（中方）では、後期の土



竪穴住居跡と掘立柱建物跡（東ノ谷遺跡）

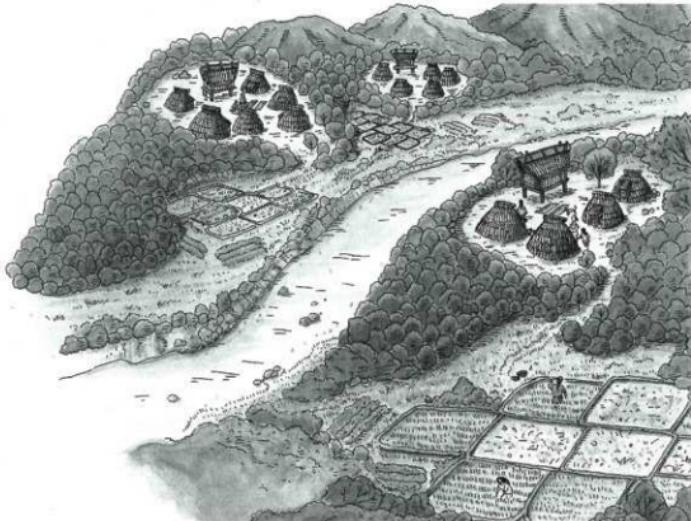
器が出土しており、流域に集落や水田が存在することが考えられます。また、横須賀支所の南に位置する天王森（ふるくす）・古楠遺跡（西大洲）でも後期の土器が出土しており、現在は海岸線から離れていていますが、当時は海に面していた砂堤上に人々が生活していましたことを示しています。



建物跡が集中している遺跡（溝ノ口遺跡）

海に面した場所に住んだ人々は、漁労を生業としていたかもしれません。

水田稲作が定着し、あちらこちらに水田が開発されるようになると、それぞれの水田の環境により米の収穫量には違いがあらわれたことでしょう。良い田を多く持つ集落は、たくわえも多くなり、人口も増えていったものと思われます。そうして、集落と集落の間には、さまざまな格差が生まれ、ともすれば対立し、緊張した関係になるなど、社会的な不安がつのっていったことが考えられます。



弥生の集落：想像図（『新・わたしたちの掛川市【歴史編】』から転載）

## 環濠集落

弥生時代の集落には、周囲に深く幅のある溝（環濠）をめぐらせたものが見られます。それは環濠集落と呼ばれ、稻作とともにもたらされたものと考えられます。静岡県西部の遺跡を見てみると、浜松市梶子遺跡や袋井市鶴松・土橋遺跡などの大きな集落では、多くの場合に環濠があります。一方、小さい集落でも環濠をめぐらせる例があります。市内では、原新田遺跡（水垂）、領家遺跡（領家）などから、環濠と考えられる溝が発見されています。環濠には、集落の境界を示す意図があると考えられます。あるいは集落を守るためにものであり、他の集落・集團との間に緊張した状態があったことを物語るものかもしれません。

## 道具

### 土器

弥生土器は、縄文土器と同じように素焼きのものです。縄文土器とはかたちや機能が違います。農耕の発達により米や雑穀が主食となり、食生活が変化したことが理由として考えられます。煮炊きをする壺と、米などをたくわえたたり、液体を入れる壺が多く出



後期の土器（奥側左から高壺、台付壺、壺、前側左から小型壺、鉢）

土します。そのほか、出土する数は多くありませんが高壺や鉢が見られます。

### 石器

縄文時代では石器がさかんに使われましたが、弥生時代にも石器が使われています。木を伐る太めの斧や小型の斧があります。掛川古城（掛川）の平成7年度の発掘調査で出土した小型の斧は、朝鮮半島で使われたものと同じかたちのものです。やはり稻作に伴い伝えられたものであり、木の加工に使われた道具と考えられます。

### 銅鐸

長谷の小出ヶ谷から銅鐸ひとつが掘り出されたことが江戸時代の記録にあります。残念ながら実物は行方不明ですが、愛知県東部から静岡県西部に集中して発見されているものと同じであるようです。破片を除く銅鐸の出土地の分布を見ると、掛川はその東限にあたります。このことは、銅鐸のまつりを考えるうえで重要なことです。

# 墓

## 土器棺墓

地面に穴を掘り、その中に甕など土器を棺にして遺体や骨を納めたと考えられる墓です。原川遺跡のような低地の遺跡の他、  
はたかまみねやま  
幡ヶ峰山遺跡（幡ヶ峰）や原遺跡（和光）など丘陵地の遺跡からも発見されています。



土器棺墓（原遺跡）

## 方形周溝墓

土壇（死者を葬った穴）のまわりを溝で  
はうけいしゆうこうば  
四角く囲む方形周溝墓は、近畿地方で前期（約2,200年前）につくられ始めた墓で、静岡県には中期中葉（約2,000年前）から導入されました。溝は角が切れるものと全周するものがあります。群をなすものが多く、溝は隣り合う墓と共有されることがあります。市内でもそのころに山下遺跡（各和）や本村遺跡（高御所）などでつくられ始め、その後、中期後葉には、岡津原Ⅲ遺跡（岡津）、不動ヶ谷遺跡（上屋敷）、原遺跡（和光）、神子地遺跡（逆川）など各所でつくられています。そのうち、原遺跡のものは20mの大型のもので、1基単独で存在し、死者を葬った土壇は5基発見されています。葬られた人は、集落・集団内の有力者と考えられます。人々の間には貧富の差が生まれていたのでしょう。



尾根上の方形周溝墓（不動ヶ谷遺跡）

後期になると、高田原・吉岡原に立地する遺跡など市内各地に方形周溝墓の分布が広がり、数も多くなります。また、中期のように、とびぬけて大きなものがつくられなくなることも特徴です。

菊川流域の兼情遺跡（海戸）では、平成12年度の発掘調査で、丘陵から低地へのなだらかな斜面に立地する後期の方形周溝墓群が発見されています。この調査では、住居の跡は発見されませんでしたが、付近に集落があることが考えられます。

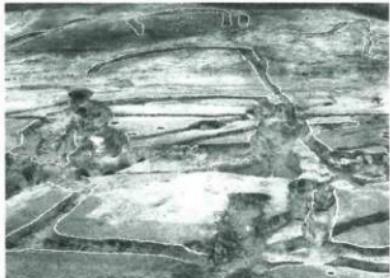
方形周溝墓の副葬品として土壇内から

出土するものは少なく、管玉数点が出土

する例がいくつか見られる程度です。その中で、原新田遺跡（水垂）で環濠のすぐ内側から発見された後期の方形周溝墓からは、鉄剣が出土しています。弥生時代の鉄製品が発見されることは県内では少なく、副葬品での出土は非常に珍しい例です。なお、鉄も稻作に伴い日本にもたらされたものと考えられます。



大型の方形周溝墓（原遺跡）



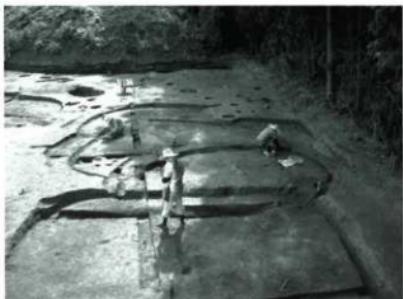
群をなす方形周溝墓（兼情遺跡）

## 市内の弥生時代の遺跡の紹介

ここでは、弥生時代の遺跡で近年行った発掘調査を紹介します。

### いまさか 今坂遺跡（吉岡）

遺跡は、袋井市との市境に近い、原野谷川によりつくられた吉岡原と呼ばれる河岸段丘の西端に位置します。平成 19 年度の調査では、中期の土器棺墓 1 基、後期の竪穴住居跡 9 軒、掘立柱建物跡 1 棟などが発見されました。土器棺墓は和田岡地域において初めての発見でした。また、掘立柱建物跡は、柱穴が溝でつながれている布掘りという柱をしっかりと立てる工夫と考えられる



重なり合う竪穴住居跡

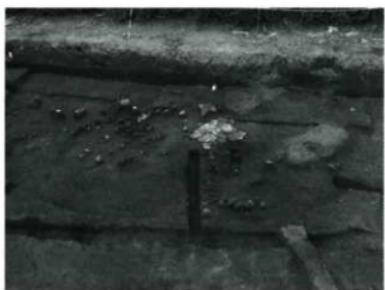
構造のもので、市内で 3 例だけが確認されている珍しいものでした。

### たかだうえのだん 高田上ノ段遺跡（吉岡）

遺跡は、吉岡原の東寄りに位置します。平成 21 年度の調査では、後期の竪穴住居跡 5 軒、後期から古墳時代前期（約 1,700 年前）にかけての掘立柱建物跡 10 棟などが発見されました。竪穴住居跡のうち火災で焼失したものがあり、屋根材や建築部材が炭になって残って



市内最大級の掘立柱建物跡



火災で焼失した竪穴住居跡

いました。それらを分析したところ、屋根材はカヤが使われ、建築部材はサカキやクリといったかたく強いことが特徴である6種類が使われていることがわかりました。木材は、ひとつの種類だけではなく、いくつかの種類を合わせて建築しているようです。また、掘立柱建物跡のうちの1棟は、けたゆき行7.53m、はりま梁間3.63mのもので、市内で発見されているこの時期の掘立柱建物のなかで最大級の規模です。

#### 女高I遺跡（吉岡）

遺跡は、高田原の東側に位置します。隣り合う高田遺跡とともに、多くの発掘調査が行われており、建物跡が集中する地点が点在していることがわかっています。平成23年度の調査では、台地の縁辺に立地する、中期後葉の方形周溝墓4基が発見されました。土壌の底の両端には細長い穴が掘られていることから、組み合わせ式の木棺が使われていることがわかりました。高田・吉岡地内で弥生時代中期の方形周溝墓が発見されたのは初めてです。



方形周溝墓



土壌（死者を葬った穴）

#### 幡鎌峯山遺跡（幡鎌）

遺跡は、原野谷川を望む台地上に立地します。平成22年度の調査で、後期の方形周溝墓1基、平地住居跡2軒、後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡4軒と掘立柱建物跡

9棟が発見されました。方形周溝墓は溝が全周するものでした。掛川市内では、平地住居は今のところ幡鎌峯山遺跡と約1km離れた台地上に立地する上ノ平遺跡（寺島）で発見されているだけです。

### 高田遺跡（吉岡）

平成24年度の調査では、高田原の北寄りの地点を調査し、後期の堅穴住居跡2軒、方形周溝墓4基が発見されました。方形周溝墓のうちの1基は周溝の一部が発見されただけでしたが、3基は周溝が全周するものでした。

### 本村遺跡（高御所）

遺跡は、逆川左岸の丘陵上に立地しています。平成24年度の調査では、中期から後期の方形周溝墓が発見されました。周溝からは、埋葬するときの祭祀に使用されたと思われる赤く塗られた壺の破片が出土しています。この丘陵には、掛川市内最古の前方後円墳である全長47mの前坪3号墳があります。弥生時代から古墳時代にかけて、墓をつくる場所として利用されていたものと思われます。

### 掛川古城（掛川）

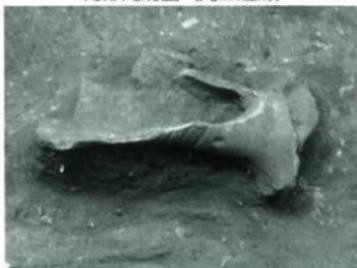
平成25年度の調査では、中期の方形周溝墓と思われる溝が発見されました。逆川右岸の丘陵から、南へ下るゆるやかな斜面につくられたものと考えられます。調査地から南に約200mはなれた地点で平成7年度に行った発掘調査でも、中期の壺が出土していることから、この付近に集落があることが考えられます。



据立柱建物跡（幡鎌峯山遺跡）



方形周溝墓（高田遺跡）



赤く塗られた土器（本村遺跡）



方形周溝墓の溝（掛川古城）

### ◆弥生時代の遺跡分布図

江戸時代、長谷で発見された  
細工で、懐中電灯が作られた。



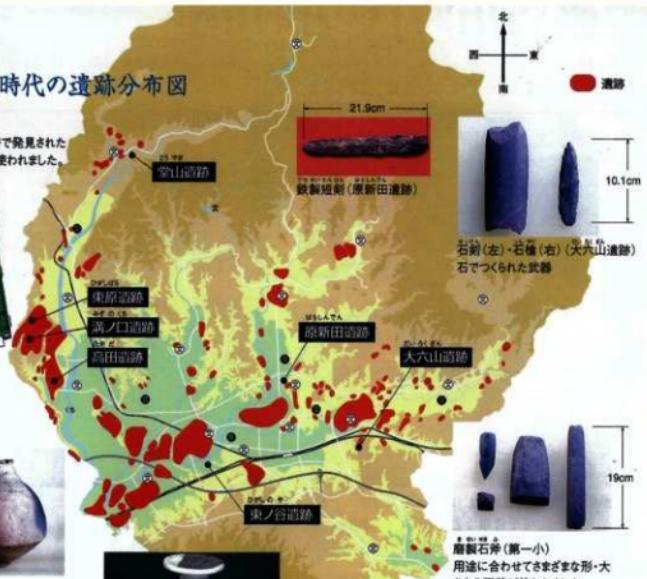
つぼ(東原遺跡)  
米などをたくさんありました。



高坏(東原道跡)  
食べ物を盛りました。



つぼ(横砂遺跡)  
米などをたくさんわえました。



磨製石斧(第一小)  
用途に合わせてさまざまな形・大きさの石器が使われました。



つば（中方道路）  
米などをなくわえました。

